

論 文

経済学の方法について

——宇野弘藏氏著「経済原論」の方法にたいする私見——

宮 川 実

一

久しく待望されていた宇野弘藏氏の「経済原論」が完結した。この書物は、真摯な学者である宇野弘藏氏の四分の一世紀以上にわたる経済学研究の総括であり、宇野氏自身の方法によって貫かれている。そして宇野氏がこの書物でのべておられる経済学の方法は、意識的あるいは無意識的に、可なり多くの理論家たちによって支持されているように思われる。そこでわたくしは、つぎに、同じ経済学を学ぶもののひとりとして、宇野氏の方法論について私見をのべ、宇野氏およびその他の同学の諸君の参考に供したいと思うのである。

宇野氏は、自分の敘述の順序が「資本論」の敘述の順序とはちがうということ、しかもそれにもかかわらずじぶん

の方法は「資本論」から学んだものであることを、くりかえして述べておられる。たとえば宇野氏は、この書の「序」のなかで、つぎのようにいっておられる。「さきに『価値論』を出版したとき、私はその序文で、それがマルクスの価値論の忠実な解説ではなく、多分に私の解釈を加えたものであることをこわった後、『私としても資本論から学んだものを私自身の考として述べる場合には、これ（資本論）と同じ方法をとるというのではない』と述べたのであるが、本書はまさに私が資本論から学んだものを私自身の考えとして述べたものである。或る点からいえばすべて資本論によっているともいえる——したがって特に引用した箇所はたんにマルクスの言葉をそのまま借用したというにすぎない。しかしまた他の点からいえば資本論を勝手に書きかえたものである。一般に資本論の解説とはいえない。いずれにしても全く私自身が資本論から学んだものを私自身の考えとして述べたものである」（上巻三—四ページ。また「あとがき」のなかでも、つぎのように述べておられる。「前にも述べたように本書は全く私が『資本論』から学んだところを私の理解能力の範囲内で体系化したものであって、しばしば『資本論』と異った展開をなしている。しかし私自身はこの異った展開をも『資本論』から学んだ論理によるものと考えるのである」（下巻三〇九ページ）。そこで『資本論』の方法と、『資本論』から学んだといわれる宇野氏の方法とを、比較してみることが必要となるのである。

マルクスによれば、経済学の方法は、経済学の対象によって規定される。そこでマルクスが経済学の対象をいかに規定しているかということから、はじめよう。

弁証法的唯物論は、一般に科学の対象についてつぎのように教える。（一）世界に存在するすべてのものは、対立物の統一であり、いづれもそれに特有な特殊な内在的矛盾をもっている。そしてそれぞれのものに特有な特殊なこの内在

的矛盾こそ、そのものをそのものたらしめる・そのものを他のものから区別する・そのものの質である。だからものの差異とはそれぞれのものに特有な特殊な矛盾の差異である。(二)世界に存在するものは、一見静止しているようにみえるものでも、すべて運動する。そしてそれぞれのものに内在する特殊な矛盾が、この運動の起動力であり、この運動の特殊な形態を規定する。たとえば菊の成長させる起動力、菊の成長の特殊な形態を規定するものは、菊の細胞に内在する特殊な矛盾であり、鶏の成長の起動力、鶏の成長の特殊な形態を規定するものは、鶏の細胞に内在する矛盾である。つまりものの運動とは、矛盾の発展である。新しいものが発生したとは、新しい矛盾が生まれたことであり、ものが発展するとは矛盾が発展することであり、矛盾が発展し激化してある段階にたつとすると、そのものは死滅して新しい他のものに転化する。(三)科学は、それぞれのものに特有な特殊な矛盾の構造とその特殊な運動形態とを研究対象とする。つまり世界に種々雑多な異なる矛盾と異なる運動形態とをもつ異なるものであるからこそ、これらの異なるものを研究対象とする異なる科学が成立するのである。

どの科学もそれぞれものに特有な特殊な矛盾とその特殊な運動形態とを研究対象とするものとすれば、経済学の研究対象はいかなる特殊な矛盾とその特殊な運動形態とであるか。それは、広義の経済学についていえば、生産様式(生産力と生産関係という対立物の統一)の特殊な矛盾とその特殊な運動形態であり、宇野氏の「経済原論」が問題にしている狭義の経済学についていえば、資本制的生産様式(社会化され発達した生産力と資本制的生産関係という対立物の統一)の特殊な矛盾とその特殊な運動形態である。経済学は、資本制的生産様式の発生、発展およびより高度の生産様式への移行を支配する法則を研究対象とするといわれているのは、このことを意味する。つまり資本制的生産様式に特有な矛盾はいかにして発生するか、この矛盾はいかなる運動形態をとって発展するか、この矛盾はいかにし

て激化し資本制的生産様式を死滅させ、より高度の生産様式を發生させるかを、経済学は研究するのである。

ところで資本制的生産様式は、單純商品生産が封建社会の胎内にウクライド（經濟制度）として發生し、發展し、ある程度の拡がりをもつようになったとき、發生した。單純商品生産は、それに特有な特殊な矛盾（社会的分業にまで發展した生産力と生産手段の私有に表現される生産關係との矛盾、それは社会的労働と私的労働との矛盾となつてあらわれる）によつて發展したが、發展してある程度の拡がりをもつようになると、不可避免的に生産者を分解して、一方には多額の貨幣をもつものを生みだし、他方には生産手段をうしなつて生きてゆくためにはじぶんの労働力を商品として売らねばならないものを生みだす。そのため多額の貨幣をもつものは、生産手段と他人の労働力とを買い入れて、労働過程を社会化し、剰余価値を手にいれるための商品生産をおこなうようになる。つまり資本制的生産様式とそれに特有な特殊な矛盾（生産の社会的性格と占有の私的資本家的性格との矛盾）が生まれるのである。そしてひとたび資本制的生産様式が生まれると、それは、それに特有な特殊な矛盾（生産の社会的性格と占有の私的資本家的性格との矛盾）によつて、しだいに發展し、産業革命によつて大工業が確立するとともに、社会の生産を支配するようになり、いわゆる産業資本主義が確立した。そして一八五〇年から一八七〇年までの間は、西欧とアメリカ合衆国における産業資本主義の全盛期であつた。ところが一八七三年の恐慌を境として、資本制的生産様式の矛盾は激化してカルテル、トラストなどの独占組織を生みだしはじめ、それがしだいに勢力をえて、一九〇〇年前後には、支配的となり、自由競争の支配する産業資本主義は独占の支配する独占資本主義または帝国主義に移行した。そして帝国主義の深まつた諸矛盾は第一次世界大戦を生み出したが、第一次世界大戦の終におこつたロシア革命の勝利は、世界を資本主義と社会主義との二つの陣営に分裂させ、資本主義の矛盾を極度に激化させ、資本主義は一般的危機の段階に

はいり、資本主義の矛盾はいよいよ深まって今日にいたっている。つまり単純商品生産——資本制的生産の全發展はそれに特有な矛盾（単純商品生産では労働の社会的性格と私的性格との矛盾、資本制的生産では生産の社会的性格と占有の私的資本家的性格との矛盾）による發展、それに特有な矛盾の激化の過程である。経済学は、単純商品生産——資本制的生産が、それに特有な矛盾によっていかに發展するか、この矛盾がいかにして激化するかを、明かにするのである。レーニンは、「資本論」についてつぎのようにのべた。「マルクスは、（この書において）社会経済の商品組織はいかにして發展するか、それは（すでに生産諸関係の内部に）ブルジョアジーとプロレタリアートという敵対的階級をつくりだしながら、いかにして資本制的組織に転化するか、またそれはいかにして社会的労働の生産性を發展せしめ、かついかにしてそのことによってこの資本制的組織そのものの基礎にたいして和解しがたい矛盾に陥る要素をもたらすかを、知る可能性をあたえる」（「人民の友とはなにか」）。

## 二

マルクスによれば、経済学は、以上のべたように、資本制的生産様式に特有な矛盾はいかにして發生するか、この矛盾はいかなる運動形態をとって發展するか、この矛盾はいかにして激化して資本制的生産様式を死滅させ、より高度の生産様式を發生させるかを、明かにしようとするのであるが、こういう資本制的生産様式の運動法則を把握するために、経済学はどういう方法をとるか。

（一）世界に存在するすべてのものは、孤立して存在するのではなく、たがいに開運しあいたがいに作用しあっている。ものに内在する特殊な矛盾によって、ものは運動し、その運動形態は規定されるが、ひとつのものの運動は、そ

れをとりかこむ他の多くのものの運動とのあいだに相互作用をおこない、それらの影響をうける。しかし他のものの影響は、そのものの矛盾の特殊な構造を通しておこなわれる。毛沢東はその「矛盾論」のなかでこの点についてつぎのようにのべている。「唯物弁証法の世界観は、事物の内部から、ひとつの事物の他の事物にたいする関係から、事物の発展を研究すること、つまり、事物の発展を事物の内的な必然的な自己運動とし、ひとつひとつの事物の運動がすべて、その周囲の他の事物とたがいにつながりをもっており、たがいに影響しあっていると主張する。事物の発展の根本原因は事物の外部にあるのではなくて、事物の内面であり、事物の内面の矛盾性にある。いずれの事物の内面にも、そのような矛盾性があり、それによって事物の発展と運動とがひきおこされる。事物の内面のこのような矛盾性が事物発展の根本原因であり、ある事物と他の事物との相互のつながり、および、相互の影響は、事物発展の第二の原因である。単純な外部的原因というものは、事物の機械的運動、すなわち、範囲の大小、量の増減をひきおこしうるだけで、なぜ、事物に性質上の千差万別があり、またそれが相互に変化しうるかを、説明しえないことは明かである。実際において、たとえ、外部的な力によつて動かされた機械的な運動であっても、また、事物の内的な矛盾性を通じて運動しなければならない。唯物弁証法は、外部的原因を変化の条件、内面的原因は変化の基礎であると考え外部的原因は内面的原因を通じて作用するものだと考える。」(全集第三卷一二—一四ページ)。そして科学は、まず、外部的なものからの影響を捨象し、内部的な矛盾による事物の発展形態を純粹に把握しようとするのである。

・同じことは、資本制的生産様式についてもいえる。いかなる現実の資本制的生産様式といえども、それだけ純粹に存在しているのではなく、封建的その他の先資本制的諸形態を従属的なウクライドとしてもっている。どの資本主義国においても、工業には手工業者が、農業には地主や小作人や自作農が、多かれ少なかれ存在するが、これらのひと

びとは資本制的生産者ではない。そのため資本制的生産様式の内在的矛盾による発展は、これらの従属的な前資本制的ウクラードとの相互作用により影響をうけ、ジグザグの道をたどるのである。そこでわれわれは、まず、抽象力の助けをかりて、現実の資本主義からこれらすべての外部的なもの（これらすべての前資本制的ウクラード）を捨象し、資本主義的生産様式を純粹なものとして観察するのである。レーニンはいっている。「純粹な現象は、自然にも社会にも存在しないし、また存在しえないことは、まさにマルクスの弁証法の教えるところである。すなわちそれは、われわれに、純粹という概念がすでに、対象をそのあらゆる複雑さにおいてもれなく把握しえない人間の認識のある狭さ、一面性を表わすものであることを教える。『純粹な』資本主義はこの世に存在しないし、また存在しえない。それはつねに封建制度や單純商品生産やその他のなものを混入している」（全集一三卷一六〇ページ）。マルクスもまたいっている。「理論上では、資本制的生産の諸法則が純粹に展開するものと前提される。現実においては、つねにただ近似が存在するだけである。しかしこの近似は、資本制的生産様式が發展すればするほど、また、前資本制的な経済状態の残滓による資本制的生産様式の不純化と混合とが除去されればされるほど、ますます大きくなるのである」（長谷部訳九六五ページ）。

(イ) 現実の資本制的生産様式は、このように多くの前資本制的ウクラードにとりかこまれ、それらとの相互作用をおこないながら、複雑な形態をもって發展する。われわれは、この現実の資本制的生産様式の複雑な歴史的發展のなかから、その基本線として貫いている・資本制的生産様式の内在的矛盾による發展形態を、どうして純粹な姿で（偶然的な攪亂的な諸要素を捨象して）把握することができるか。われわれは、そのために、現実の資本主義の基礎構造が確立した發展段階、すなわち産業資本主義の全盛期をとり、その経済的構造を分析する。そこにはいろいろの生産諸

関係が並存している。地主が産業資本家たる農業経営者から地代をとるという関係もあれば、金貸資本家が産業資本家や商業資本家から利子をとるという関係もある。生産部門を異にする産業資本家たちが、互に競争して平均利潤を形成するという関係もあれば、産業資本家が賃労働者をやもって剰余価値を搾取するという関係もある。ところがこれらの生産諸関係を立ち入って観察すると、それらはばらばらにたがいに無関係に並存しているのではなく、たがいに有機的連絡をもち、それらの総体が資本主義の経済的構造を形づくっているのである。地代や利子は平均利潤の基礎のうえに成立しており、平均利潤は剰余価値と個別利潤の基礎のうえに成立しており、剰余価値は価値の基礎のうえに成立している。つまり資本制社会の生産諸関係のあいだには、おたがいに内面的関係があるのである。そして生産諸関係のあいだの内面的連絡をたどってゆけば、すべての生産諸関係のあいだには一定の順序があり、もっとも一般的なものとも抽象的な生産関係（じぶんのために生産している私の商品生産者たちが社会的分業の一環として相互のために生産しているという関係）の基礎のうえにより特殊なより具体的な生産関係が築かれており、このより特殊なものより具体的な生産関係の基礎のうえにさらにいっそう特殊なより具体的な生産関係が築かれており、前者の生産関係と生産力との矛盾は後者の生産関係のうちに一時的な解決をみいだしながら（つまり後者は前者と生産力との矛盾の運動形態をなしておりながら）後者の生産関係は生産力とさらに拡大された矛盾におちいつているのである。つまり資本制社会の経済的構造（生産諸関係の総体）は、もっとも一般的なものとも抽象的な生産関係と生産力（この段階にまで発達した高い生産力）との矛盾が、つぎつぎにより特殊なより具体的な生産関係のうちにその一時的な解決（運動形態）を見出しつつ拡大激化してゆくように、弁証法的に組みたてられているのである。

そこで経済学は、その敘述をなすにあたっては、資本制社会の経済的構造を構成する生産諸関係のうちの、もっと



も一般的なものとも抽象的なものとも簡単な生産関係から出発する。そして内面的な連絡（矛盾の発展関係）をたどりながら、より特殊なものより具体的なより複雑な関係にすすみ、ついにもっとも特殊なものとも具体的なものとも複雑な関係にまで到達し、資本制社会の経済的構造を、「多様の統一」として、精神的に再生産するのである。こういう方法によってはじめて、資本主義の経済的構造は、資本制的生産様式に内在する矛盾の発展段階として、矛盾の総和として、把握されうるのである。

しかし発達した資本制社会の経済的構造のこういう把握——「ブルジョア社会の生理学」——がどうして資本制的生産様式の内在的矛盾による発展を純粹な形で（偶然的攪乱の要素を捨象して）把握することになるのか。これは普通に論理的発展と歴史的発展との関連の問題として論じられているところの問題である。

### 三

論理的発展というのは、発達した資本制社会の経済的構造を構成する生産諸関係のうちの、もっとも一般的なものとも抽象的なものとも簡単な生産関係から出発して、内面的連絡（矛盾の発展関係）をたどりながら、より具体的なより特殊な生産関係にすむことである。それは、資本制社会の経済的構造の同時に存在する諸関係のあいだの内面的連絡をたどることである。歴史的発展というのは、ここでは、単純商品生産と資本制的生産とがそれらに内在する矛盾によっておこなう具体的な歴史的発展である（原始社会、奴隸社会、封建社会、資本制社会という世界的発展のことではない）。単純商品生産と資本制的生産との具体的な歴史的発展は、それらに内在する特殊な矛盾にもとずいておこなわれたけれども、それらを圍繞する封建的等々の他の経済制度との相互作用のうちにおこなわれたため

に、ジグザグの道をたどったのである。

理論的發展と歴史的發展とはどういう關係にあるか、という問題は、いままで經濟學者のあいだでは、「資本論」第一部第一篇の商品は資本制的商品であるか單純商品であるかという問題として、あるいは価値法則は歴史的にウクラードとして実在した單純商品生産に妥当するかどうかという問題として、長いあいだ論争されてきたが、両者の内の連関はつぎの点にある。歴史的具体的な單純商品生産および資本制的生産は、封建的經濟制度など外的諸条件の影響をうけながらも、それらに特有な特殊な矛盾によって弁証法的發展をとげてきた。それらに特有な特殊な矛盾によって弁証法的發展をとげるとはどういうことか。

原始共同体の生産力がある段階まで發達して剰余生産物が生れると、原始共同体と原始共同体とのあいだに、たとえば「 $1匹の魚 = 1クントルの牛乳$ 」という商品交換がはじまる。これは、原始共同体Aがじぶん自身の利益のために共同体Bの必要とする魚を生産し、共同体Bもじぶん自身の利益のために共同体Aの必要とする牛乳を生産するという、ひとつの新しい生産關係が成立したことを、意味する。すなわち、單純商品生産の基本的矛盾である社会的分業が可能な程度にまで發達した生産力と占有の私的形態との矛盾、あるいはその現われである社会的労働（他人のための労働）と私的労働との矛盾が発生したのである。（共同体の所有は共有であるが他の共同体にたいする關係においてはすでに私有の萌芽があらわれている）。この新しい生産關係は、生産力を發達させる刺戟となったが、生産力が發達して商品（牛乳と魚）の分量がある程度以上に増大すると、その生産關係は、二つの共同体の魚と牛乳にたいする需要にかぎりがあるために、生産力のより以上の發達を阻止するようになった。魚も牛乳も、二つの共同体の需要をこえて生産されるばあいには、無用のものとなるからである。そこで魚も牛乳も他の多くの原始共同体の剰余生産

物——たとえば共同体Cの小鳥、共同体Dの小麦など——とも交換されるようになった。これは、多くの共同体がそれぞれじぶん自身の利益のために他の共同体の必要とするものを生産しあうというひとつの新しい生産関係である。しかし商品生産および交換のこの新しい段階においても、第一段階の  $\text{油} = \text{牛乳}$  という関係がなくなったのではない。それはこの新しい関係  $\text{1尾の魚} = \text{1リットルの牛乳}$ 、あるいは  $= 2羽の小鳥$ 、あるいは  $= 1キロの小麦$  等々のなかに基礎として含まれている。この新しい第二の関係は、多数の第一の関係から構成されている。つまりこの新しい第二の関係は、社会的分業が可能な程度にまで発達した生産力と占有の私的形態との矛盾、あるいはその現われである社会的労働（他人のための労働）と私的労働との矛盾が生産力の発達したため激化した段階における矛盾の一時的解決（矛盾の運動形態）にほかならない。ところでこの新しい第二の生産関係は、生産力をさらに発達させる刺戟となったが、（その結果共同体そのものを崩壊させる原因となったがそのことについてはここでは問題にしない）、生産力が発達してある一定の段階にたっし剰余生産物の分量が多くなってくると、それは生産力のそれ以上の発達を阻止するようになった。豊富になった商品が直接的な商品交換の仕方では処理することは、困難になったのである。そのため激化したこの矛盾は、すべての商品が貨幣を媒介としてたがいに交換されあうという新しい第三の関係によって、一時的に解決されることとなった。しかしこの新しい第三の段階は、第一の関係と第二の関係をとたんに否定しているのではなく、それらを止揚し、じんぶの基礎的な抽象的な関係として自己のうちに含んでいるのである。そしてこの第三の関係は、生産力をさらに前進させる刺戟となり、商品生産および交換をさらに発展させたが、商品生産および交換が相当広い範囲でおこなわれるようになると、不可避免的に、単純商品生産者は分化して、産業資本家と賃労働者になり、資本制の生産様式とその基本的矛盾（生産の社会的形態と占有の私的資本家的形態）とが生

みだされる。しかし資本制的生産様式は、單純商品生産の關係をたんに否定しているのではなく、それを止揚し、じぶんの基礎として、抽象的な關係として、じぶんのうちに含んでいるのである。別の言葉でいえば、資本制社会の經濟的構造（生産諸關係の總體）のうちには、單純商品生産が発生して以来の全發展が、止揚されて、その基礎として、抽象的な一般的な關係として、いわば圧縮された形で、含まれているのである。

それゆえ資本制社会の經濟的構造は、單純商品生産が発生して以来、生産力と生産關係との矛盾が一時的に解決されてはまた拡大再生産されてきた全過程を、いわば圧縮された形で含んでおり、その矛盾をもっとも拡大され激化された形でもっているのである。つまり資本制社会の經濟的構造は、矛盾の現發展段階である。だから資本主義の經濟的構造を、そのもっとも基礎的なもっとも抽象的な生産關係から出發して、もっとも特殊なもっとも具体的な生産關係にまで、内面的連絡（矛盾の發展關係）をたどりながら進むことにより、「多様の統一」として、「多くの諸規定の總括」として、精神的に再生産することは、單純商品生産——資本制的商品生産の全歴史的發展を、その矛盾による弁証法的發展にしたがって（すなわちそれを包圍する外的諸条件による偶然的攪亂的影響を捨象して）たどるところと照応するのである。しかしたんにそれだけではない。論理的發展も歴史的發展とともに矛盾の發展ではあるが、論理的發展においては生産力が高度に發達した資本制社会を前提しているために、その發展の各段階が完全に發展し完全に成熟しているが、歴史的發展においては、生産力が低い段階から高い段階にしだいに發展するのに照応して、發展の最初の段階では生産關係が内包的にも外延的にも未發展であり、より高度の段階にすすむにわたってますます發展する。たとえば、論理的發展の出発点をなす商品（「資本論」第一部第一篇のはじめにでてくる商品）は、生産力が高度に發達し社会的生産が全面的に商品生産化している資本制社会の商品からその資本制的性格を捨象した商

品であり、したがって私的商品生産者たちがじぶんの利益のために全面的に他人の必要とするものを生産しあうという生産関係をあらわすが、歴史的発展の出発点にある商品は、生産力の低い二つの共同体のあいだの交換を前提し、ただ二つの商品生産者がじぶんの利益のために他人の必要とするものを生産しあうという生産関係をあらわすにすぎない。前者は発展し成熟しており、後者は未発展であり未熟である。マルクスはいつている。『このまったく簡単な範疇は、その集約性においては、歴史的にいうと、社会のもっとも発達した状態以外では現われない。たとえより簡単な範疇は、歴史的には、より具体的なものに先だつて實在していたとしても、その内包的および外延的の完全な発展においては、それはただ複雑な社会諸形態にのみぞくしうるのである。』（『経済学批判序説』青木文庫版三一五—三一六ページ）。しかし論理的発展の出発点にある商品と、歴史的発展の出発点にある商品とは、内在的矛盾による弁証法的発展という点からみれば、照応する位置にある。だから、論理的発展は、歴史的発展から外的諸条件による偶然的攪乱の諸要素を捨象し、その各段階を「その完全に成熟した・典型的な・発展点において」（エンゲルス）みたものにはかならない。こうしてわれわれは、発達した資本制社会の経済的構造の弁証法的編成を明かにすることにより、単純商品生産——資本制的生産の内在的矛盾による全発展を、より正しく理解することができるのである。

以上述べたような理由のために、経済学の敘述の順序は、資本主義の経済的構造の弁証法的編成の順序、すなわち、もっとも基礎的なもっとも抽象的な生産関係と生産力との矛盾から出発し、矛盾の発展関係をたどりながら、一歩一歩より具体的なより特殊的な生産関係にすすむことでなければならぬ。そしてこの敘述の順序は、単純商品生産——資本制的商品生産の内在的矛盾による発展（自己運動）の全歴史的過程と照応する。経済学は、こういう方法によ

つてのみ、資本主義の現発展段階を資本主義の基本的矛盾の現発展段階として把握することができ、社会の変革の導きの糸として役立ちうるのである。レーニンは、「弁証法の問題によせて」という短文のなかで、つぎのように述べている。「マルクスの『資本論』においては、まずブルジョア（商品）社会のもっとも単純な・もっとも通常な・もっとも根本的な・もっとも大量的な・もっともありふれた・何十億回となく出くわす関係、すなわち商品の交換が分析される。分析はこのもっとも単純な現象（ブルジョア社会のこの『細胞』）のうちに現代社会のすべての矛盾（またはすべての矛盾の萌芽）を暴露する。いっそう進んだ敘述はわれわれに、これらの矛盾とこの社会との発展を（生長をも、運動をも）その個々の部分の総和において、その始めから終りまで示してくれる」（永田訳「唯物論と経験批判論」五四五ページ）。

そのため資本論では、資本制的生産様式が支配的な社会のもっとも基礎的なもっとも抽象的な生産関係と高度に発達したこの社会の生産力との矛盾の物的表現である商品から出発する。そして商品にふくまれる矛盾の特殊な性格を明かにするために、まず第一章「商品」で商品という対立物の統一の二つの要因、使用価値と価値とを、それぞれ孤立させて（他方を捨象して）観察する。そして使用価値についてはその質と量とを観察する。ものを正しく把握するためには、そのものの質と量と形態とを明かにすることが必要であるにもかかわらず、使用価値についてその形態をここで問題にしないのは、使用価値の形態は自然形態であり、だれにも容易に理解できるからである。つぎに価値についてその質と量と形態とを明かにする。そして第二章「交換過程」で使用価値および価値という対立物の統一である商品を全体的に観察し、使用価値と価値との矛盾の特殊な性格を明かにし、この特殊な矛盾がいかなる運動形態をみいだしつつ発展するかを敘述する。マルクスは「資本論」の初版では、使用価値と価値との研究を終って交換過

程にすすむ前に、つぎの一句を挿入していた（この句は二版以後は削除された。）「商品は、使用価値と価値との・すなわち二つの対立物の・直接的な統一である。だからそれはひとつの直接的な矛盾である。商品がこれまでのように分析的に、まず使用価値の観点のもとで、つぎに交換価値の観点のもとで、かわるがわる観察されるのではなく、ひとつの全体として現実に他の商品に關係させられるやいなや、かかる矛盾はみずから展開せねばならぬ。ところで諸商品相互の現実的な關係はそれらの交換過程である」（『資本論初版』宮川実訳八四―八五ページ）。エンゲルスもマルクスの方法についてつぎのようにのべている。「この方法にあっては、われわれは、歴史的に、事實上、われわれの前に横わる最初のかつもつとも簡単な關係から、したがってここではわれわれが眼の前にみる最初の經濟關係から、出發する。この關係をわれわれは分析する。それがひとつの關係であるということのうちに、すでに、それがたがいに關係しあう二つの側面をもつということが含まれている。それらの側面のおおのは、それ自体で觀察される。それから、それらがたがいに關係しあう仕方、それらの交互作用が現れてくる。解決をもとめる諸矛盾が生まれる。しかしわれわれは、ここでは、われわれの頭腦のなかに現われる抽象的な思维過程を觀察するのではなく、なんらかの時に現実に起った・あるいはいまなお起っている・現実の出来事を觀察しているのだから、これらの矛盾もまた実践においてみずから展開し、おそらくその解決を見出しているであろう。われわれは、その解決の仕方をたどり、それがひとつの新しい關係を樹立することによっておこなわれていることを見出すであろう、そしてわれわれは、こんどは、この新しい關係の二つの対立する側面を展開せねばならぬであろう。等々」（『經濟学批判』青木文庫版二六六ページ）。

#### 四

いままで述べてきた視角から、宇野氏の方法について若干の私見をのべよう。

宇野氏は、資本制社会の経済的構造を構成する生産諸関係のあいだの内面的連絡を矛盾の発展として把握しようとしていないようである。このことは、資本制的生産様式の発展を矛盾の発展として把握されないことを意味する。

たとえば宇野氏は、「序論」の第二節「経済学の方法」のところで、マルクスの「経済学批判序説」のなかの有名な下向および上向の道にかなする説明を引用した後で、二つの点を問題にされる。ひとつは、下向の道の終点（分析の終点）にあるもっとも単純な概念とはなにかという問題である。宇野氏はいわれる。「それは商品以上に簡単なものであってはならない。実際また商品関係は資本主義社会の中心基軸をなしているものであって、それ以上に抽象されると、資本主義も特殊な歴史的関係をもたないものになってくる。マルクスがその『資本論』を商品からはじめているのは、そのためだと私は解している」（一〇ページ）。その通りだとわれわれも思う。しかしなぜ商品関係は資本主義社会の中心基軸をなしており、それ以上に抽象されると資本主義も特殊な歴史的関係をもたないものになってくるのか。宇野氏は、このことについてなんら説明されない。さきにのべたように、商品経済体系が他の経済体系とちがった経済体系であるのは、それが生産力と生産関係との歴史的に特殊な矛盾をもっているからであり、商品はこの歴史的に特殊な矛盾をもっとも簡単な形で物的に表わしているのである。商品経済体系の発展はこの矛盾の発展にほかならないし、資本主義の経済的構造を構成する生産諸関係の内面的連絡はこの矛盾の発展関係にほかならない。だからこわれわれは下向の道を商品までしか辿ってはならないのである。下向の道を辿るとは、矛盾の発展を逆行する



ことにほかならない。宇野氏はこのことを説明するべきであつたろう。

宇野氏が問題にされるもうひとつの点は、上向の道の終点（綜合の終点）における具体的なものはなにかという問題である。宇野氏はいつておられる。「この下向過程の終点たる商品から逆に貨幣、資本、等々と展開されてくるとこの過程ではもはや特定の国の特定の時代の具体的な人口ではなく、資本主義一般に通ずる、その人口の階級関係が明かにされるにすぎないことになってくる」（二一ページ）と。なぜそうなのか。宇野氏はここでこの問題を矛盾の発展という見地から把握しようとしなくて、経済過程を政治、法律その他のいわゆる上部構造にぞくするものの影響から分離して抽象的に理論体系化するためだと説明する。しかし上部構造が国々によってちがうのは経済的土台が国によってちがうからである。だからこの問題を上部構造の影響がちがうということによって説明するのは誤りである。

問題は、経済過程の内部で説明されねばならない。純粹な商品資本主義体系はどこにも存在しない。商品資本主義体系は、封建的等々の前資本主義的な経済諸制度に囲繞され、それらとの相互作用のうちに發展する。しかし経済理論は、商品資本主義体系がそれに特有な特殊的な矛盾によっていかに發展し没落するかを、外部的影響を捨象して、「純粹な姿で」、明かにすることを目的とする。だからそれが特定の国の具体的な人口の階級関係を明かにしないで、「純粹な」資本主義の一般的階級関係を明かにするとどまるのは、当然である。われわれが、商品資本主義経済体系の内在的矛盾による自己運動を明らかにするために、發達した資本主義の経済的構造を分析するのであるが、そのさい封建的等々の前資本制的諸関係を捨象し、「純粹な」資本主義を観察するのは、当然である。だからもしもわれわれが、特定の国の、たとえば日本の、具体的な人口の階級関係を明かにしようと思えば、われわれは、経済理論の教える「純粹な」資本主義の諸階級の一般的な関係からさらに一步すすんで、その外圍をなす封建的等々の諸関係と

の相互作用をも具体的に観察しなければならない。

宇野氏が資本制的生産様式を矛盾の発展という見地から把握されていないことは、経済原論と経済史との関係についての宇野氏の説明にもよく現われている。宇野氏はいう。「経済学がこの（資本主義社会の）特殊な歴史的形態を明かにすれば、それは当然に他の古代、中世の社会にもそれに特有な形態の社会関係のあることを想定せしめ、それが資本主義社会といかに異なるかを明確にしうる基準をあたえられることになるわけである」（二五ページ）と。なるほど、「ブルジョア社会は生産のもっとも発達したもっとも多様な歴史的組織体である。それゆえ、その諸関係を表現する諸範疇は、その編成の理解は、同時に、すでに没落しきつたすべての社会形態の編成と生産諸関係とにたいする洞察をあたえる」（『経済学批判序説』三一九ページ）。しかし資本制的生産様式の一般的発展法則を明かにする経済原論は、封建制的生産様式の一般的発展法則の理解にたいして鍵をあたえるのであって、この封建的生産様式の一般的発展法則の正しい理解が、特殊な封建的生産様式、たとえば日本の封建的生産様式の具体的な歴史的発展——経済史——の研究にたいして導きの糸をあたえるのである。というのは、封建的生産様式の発生、発展および消滅を研究対象とするはあいにも、それ自身に特有な特殊な内在的矛盾による一般的運動法則をまず明かにし、つぎにこの矛盾による自己運動が他の経済制度との相互作用のなかで具体的に自己を貫徹する姿を明かにすることが必要だからである。

この点をはっきりさせるものは、経済原論と資本主義の経済史との関係であろう。経済原論は、資本制的生産様式の発生、発展および死滅がそれ自身に内在する歴史的に特殊な矛盾によっていかにおこなわれるかを、封建的等々の経済制度の外的な攪乱的な影響を捨象して、「純粹な」姿で、把握する。資本主義の経済史は、日本、イギリス、アメリカ等々の特殊な資本主義が、封建的等々の経済制度との相互作用のうちに、それ自身に内在する矛盾によつてい

かに具体的に發展してきたかを、明かにする。どちらも資本制的生産様式の矛盾による自己運動を研究対象とする。異なるところはただ、経済原論ではこれを「純粹に」、偶然性と攪乱の諸要素とを捨象して、把握するが、経済史はこれを偶然性と攪乱の諸要素とをとりいれて、具体的に把握するということだけである。

宇野氏は、経済原論と資本主義の發展段階との關係について、つぎのように述べられる。「経済原論によって与えられる資本主義社会がそのまま十七世紀に成立して現在にいたるまで存続するわけではない。中世紀社会から資本主義社会への過渡的段階から、現在のごとき資本主義そのものの存続が問題になる時までの間には、世界的にその時代によって中心的な支配的地位にある資本の形態自身も變化してきている。すなわち十七、八世紀の商人資本、十八世紀後半の産業革命から十九世紀七十年代までの産業資本、それ以後の金融資本は、いずれも資本主義の發生、成長、成熟の各時期に必然な、その過程に適応した、資本の歴史的形態をなすのであって、国家の政策も財政も、これに應じた性格と機能とを有するのである。経済原論の対象をなす純粹な資本主義社会は、産業資本主義の時代に、しかも具体的にはイギリスにおいて、もっとも近似的に見出されるにすぎない。経済政策や財政は、これを理論的に取扱うとしても、原論のばあいとちがって、資本主義一般に通ずる法則をもってするわけにはゆかないのである」(一七ページ)。

宇野氏はここで、経済原論は「純粹な」資本主義の一般的運動法則を明かにすることを目的とするということを、内在的矛盾による自己運動を外部的な諸影響を捨象して研究するという意味に理解しないで、自由競争の完全におこなわれる産業資本主義を「純粹に」研究するというふうに理解される。だから「経済原論の対象をなす純粹な資本主義社会は、産業資本主義の時代に、しかも具体的にはイギリスにおいて、もっとも近似的に見出されるにすぎない」

ということになる。これは、「純粹」という語の意味をわれわれとちがって理解された結果であろう。われわれにとっては、「純粹に」資本主義を考察するとは、偶然的な攪亂的な諸要因を捨象して（他の諸体系との相互作用を捨象して）、資本主義の内在的矛盾による自己発展を考察することである。このことと、経済原論がまず産業資本主義の経済的構造を分析することとは、別のことである。経済原論は、資本制的生産様式が單純商品生産の内在的矛盾による発展の結果いかに発生するか、ひとたび発生した後はそれ自身の特殊な矛盾によっていかに発展するか、を明らかにするために、まず資本主義の基礎構造が確立した産業資本主義の経済的構造を分析し、そこにふくまれている矛盾の特殊な性格を明かにするのである。しかし経済原論の内容は、産業資本主義の経済的構造を分析した「資本論」の内容容だけにつきるものではない。資本制的生産様式の矛盾は、その後さらに発展して、産業資本主義を帝国主義に移行させ、さらに一般的危機に移行させ、いまや資本制的生産様式そのものを爆破する程度にまで激化している。経済原論は、資本制的生産様式の矛盾のこの全發展を、偶然的攪亂的諸要素を捨象して「純粹な姿」で、今日にいたるまで迎らねばならない。こうして資本制的生産様式の矛盾の全發展が、自己運動が、純粹な姿で把握されたときはじめて、われわれは具体的な特殊な資本主義、たとえば日本資本主義の具体的な歴史的發展——封建的等々の他の諸体系との相互作用のうちに自己貫徹する自己運動の具体的な姿——を把握するための鍵をあたえられる。そのばあいのみ、経済原論は、現段階の階級斗争に理論的武器を提供しうるのである。宇野氏は、経済政策や財政が資本主義の發展段階の異なるにつれて異なることについてのべておられるが、なぜそうであるかは、第一には、矛盾の發展を純粹にたどる経済原論によって、第二には、それぞれの国の特殊な諸条件をも考察する具体的研究によって、説明されねばならない。

宇野氏は、商品資本主義的体系の発展を内在的矛盾による自己運動として把握されないために、封建社会の胎内に発展した単純商品経済を生産関係としてみないで、たんなる商品流通と考える。宇野氏はいっておられる「もちろん、この商品、貨幣、資本の流通形態の発展の過程の背後には、生産過程の発展があるわけである。しかしそれは、たとえば奴隷による生産過程とか、農奴による、あるいは職人によるそれとか、さらにまた資本の生産過程とかいうような特殊な歴史的規定をうけた生産過程の発展があるわけではない。したがって流通形態の発展を生産過程によって裏づけるといっても、そういう歴史的規定をもつてするわけにはゆかないので、単に抽象的に、商品化される生産物の生産が發展し、拡大してきたと想定するよりほかはない。後にのべるように、そういう程度の生産過程の規定をあたえたからといって、流通形態が生産によって裏づけられたとすることはできない」(二二ページ)。

もちろん、封建社会の胎内で単純商品の生産関係が發展したといっても、純粹な単純商品生産者は封建社会の末期に現われたにすぎない。多くの単純商品生産者は、その半身においては封建的農奴であって、封建領主とのあいだに封建的な生産関係をむすんでいたが、他の半身では単純商品生産者であって、その剰余生産物の一部分を社会的分業の他の環をなす他の単純商品生産者のために生産したのである。つまり、封建社会の一面的抽象的な関係として、単純商品生産の生産関係(生産手段を所有する生産者たちが直接にはじぶんの利益のために生産するが、しかし他の生産者たちの必要とする財貨を生産しあうという生産関係)が發展したのである。単純商品生産の生産関係のない単純な商品流通があったわけではない。しかし宇野氏は、資本制社会以前には、単純商品流通の關係はあったが、単純商品生産の關係はなかったと考えられる。だから、商品が、社会的分業の可能な程度にまで發展した生産力と生産手段の私有に表現される生産関係との矛盾を表わすということ、つまり社会的労働と私的労働との矛盾を表わすということ

はない。だから単純商品を対立物の統一として把握するということ、したがって単純商品の分析によって価値の質を明かにすることは、不可能となる。そのため宇野氏は、経済原論の第一篇を「流通論」とし、この流通論では価値の質については説明しないで、価値の形態（価値が流通過程でとる形態）についてののみ説明する。そして第二篇「生産論」の第一章「資本の生産過程」で価値増殖過程の説明を終った後に、「価値法則の確立」という一節をもうけて、価値の質について説明し、第三章「資本の再生産過程」の第三節「社会総資本の再生産過程」を終ったあとで、「価値法則の絶対的基礎」について説明する。宇野氏はそこでつぎのようにいわれている。

「商品の価値は、個々の商品をとってみたのでは、その実体を把握することができない。吾々が第一篇の流通論で商品を取扱ったばあいには、その形態を明かにするのに終始したのもそのためである。そして第二篇生産論においてあらゆる生産物が資本によって生産せられる資本の生産過程を明かにするにいたってはじめて、その実体を労働に求めることができたのである。いまや生産論を終るにあたって、あらゆる生産物が商品として生産される資本家的再生産過程を総括的に展開するとき、価値法則は、否定しえない絶対的基礎をあたえられる」（二六八—二六九ページ）。

経済原論では、資本制的生産様式が支配的な社会の経済的構造を分析し、それを構成する生産諸関係のなかのものと基礎的なものととも抽象的な生産関係と生産力との矛盾からその敘述をはじめめる。単純な商品はこの矛盾を物的に表わす。そして商品の価値は、このもつとも基礎的なものととも抽象的な生産関係の対象的表現である。われわれは、論理的発展のこの段階で、価値の形態だけでなく価値の質をも把握することができ、また把握しなければならぬ。商品という対立物の統一の二つの側面、使用価値と価値とについて、質と量と形態とを明かにしてはじめて、商品の矛盾の特殊性格は正しく把握される。商品の矛盾の特殊性格をはっきりつかむということは、資本主義の経済的構造

の弁証法的編成を把握するための基礎である。宇野氏は、価値の質は単純な商品の分析によっては把握されえないと考えておられるが、これは論理的発展の出発点にある単純な商品が発達した資本制社会の経済的構造を前提しており、そのもっとも基礎的なもっとも抽象的な関係をあらわすものだということを、忘れておられるためではないか。

宇野氏は、じぶんの方法は流通主義ではないと力説される。宇野氏はいっておられる。「第一篇を流通論とすることは、あるいは経済学的常識に反し、事によるといわれる流通主義の批評をさえ受けることになるかもしれない。しかし、資本主義は元来そういう流通主義的性格を有するものであって、これを生産過程から説明することは、むしろ流通形態が生産過程を把握しななければならないことになって、この点を忘れなければいわゆる流通主義に陥る危険もないのである」(二〇ページ)。しかし宇野氏は、まず単純商品生産の生産関係のない単純商品流通の関係があって、ここでは生産関係の对象的表現である価値の質のない価値の形態だけがあり、この商品の流通関係が生産過程を把握したとき資本制的生産関係が生まれ、価値の質は確立する、と考えられる。こういう考え方を、われわれは流通主義と名づけてもよいのではないか。

最後にもうひとつ、宇野氏が資本制社会の発展をそれに特有な特殊な矛盾の発展として把握されない例をあげよう。宇野氏は、第三篇「分配論」で資本家群のあいだへの剰余価値の分配を説明するさいに、第一章利潤、第二章地代、第三章利子という篇別とし、第三章利子のなかで商業利潤をも説明する。この順序は、「資本論」の敘述の順序とはちがっている。「資本論」では、まず第一——第三篇で平均利潤の問題を説明し、つぎに第四篇で「商業資本と貨幣資本の商品取扱資本と貨幣取扱資本との転形」を、第五篇で「利子と企業者利得への利潤の分裂、利子生み資本」

を、第六篇で「超過利潤」の地代への転形」を、敘述する。宇野氏の順序と「資本論」の順序とでは、商業資本、利子生み資本と地代との位置が転倒しているのである。これは些細なことのように見えるが、けっしてそうではない。マルクスはまず社会の総産業資本がもつれあいながら循環するうちに利潤が平均利潤に転化する過程を説明し、つぎに産業資本の循環にふくまれている矛盾のために産業資本の一姿態たる商品資本がいかにして自立化して商品取扱資本に転化するか、産業資本と商業資本との循環にふくまれている矛盾のためにそれらの一姿態たる貨幣資本がいかにして自立化して貨幣取扱資本となるか、産業資本と商業資本との循環にふくまれている矛盾のためにいかに遊休資本が動員されて利子生み資本となるかを、説明する。商業資本と利子生み資本とは、産業資本の循環にふくまれる矛盾から必然的に派生するのである。土地の私有は、資本制的生産様式にとっては外的なものである。土地が国有になっても、資本制的生産様式は存在しうる。そのためマルクスは、資本の説明を終ったあとで土地所有に移行した。「資本から土地所有への移行は、（論理的であると）同時に歴史的である。というのは、土地所有の近代的形式は封建的等々の土地所有にたいする資本の作用の産物だからである」（一八五八年四月二日エンゲル宛のマルクスの手紙）。資本主義の矛盾が深まってくると、利子生み資本の発展した銀行資本は産業資本と癒着して巨大な独占力をもつ金融資本となる。そしてこの金融資本は地主とブロックを形成して、労働者農民に対立する。マルクスの敘述の順序のように矛盾の発展をたどるばあいには、論理の発展はこういう結果に当然到達する。しかし宇野氏の敘述の順序のように利潤と利子とのあいだに地代を置いたのでは、金融資本の形成、金融資本と地主とのブロックの形成の問題を、論理の発展として把握し難くなるのではないか。

宇野氏の「経済原論」は上巻下巻合せれば五八六ページにおよぶ大著であり、宇野氏はそのなかで「経済原論」の



あらゆる問題と真面目に取組んでおられる。ここではわたくしは、宇野氏の全巻を貫く方法についての若干の疑問をのべたのであるが、その他の問題についてもいろいろな異見をもっている。それらの点については、近刊されるわたくしの「経済原論」のなかで私見をのべておいた。それを併せ読んで戴ければ幸である。